

平成二十四年(二〇二二年)六月十八日 人を導く

人を導く、その根底に、己の愚かさ傲慢さ、さなるものへの反省と、真の悔い詫び、必要なり。

人の御魂は迷えるもの。迷い、惑いの生の中にて、確かなものを求めるもまた、人の性なり、弱さなり。

人の心は弱きものにて、ひとたび信じ、安んずるとも、次なる時には、また疑い始める。

導く者が揺れ動きなば、人は従うこと、能わず。

導く者の不動の心が、自ずと人を導くものなり。

不動の心は、信じる心、迷わぬ心を指すものなれば、日々の波風、晴れ曇りに、一喜一憂することなし。

導く者に求めらるるは、自ら信じ、疑わず、疑心の念が芽生えるとも、それを越え、惑いのささやきに、耳を塞ぐことが肝心。

見える確かなものはなし。手にて触れ得るものもなし。

あるは己の心の奥に、自らの道を求むか否か。

迷い疑うこと易し。

見えるもののみ信じるは、誰にもできる 易きこと。

修行もいららず、精進も、自ら鍛える心も不要。

日々の暮らしに墮すのみにて、人は何らの昇華も計れず。

なれど人の本性は、自ら御魂の昇華を望み、祈りに託して生きることなり。

人の御魂の安らぎは、物質のみに己を任せ、見えぬものをば否定して、心を閉ざすことになし。

御魂と共に振るえ高まる、自然の奥の聖なるものに、心を開き、委ねるときこそ、御魂は喜び、躍動せむ。

人を導く者は求めよ。

聖なるものへの共振共鳴。

日々の寢食、雑事に明け暮れ、御魂の浄化や安らぎを、疎かに怠けることなかれ。
導く者は求められむ。人より厳しき心の修養。

時々刻々と変わりゆく、浮世の流れに流されず、流れの淵に身を落ち着けて、己の心を制御せよ。

この世は一瞬、泡沫の夢。覚めしときには、あの世に帰れり。
なれど夢にて終わらすなかれ。

泡沫なるは本質ならず。

悠久無窮の時の流れの、その一瞬を煌めく閃光。

宇宙とつながる命の流れは、一瞬なれどもかけがえのなし。

導く者こそ、迷うなよ。泡沫なるに惑わさるるな。

厭世気分えんせいの蔓延まんえんに、自ら落ちゆくことなかれ。

日々の祈りで、御魂を養い、錬磨れんまと陶冶とうやを重ねるべし。

導く者の固き信念、揺るがぬ心が、人を導く。

世の諸人もろびとは、徳ある人の、祈りを通して導かるるなり。

自らの持つ半端な思いも、徳ある人の祈りを通じて、高き思いへ修練しゆれんを遂ぐ。

導く者は、受け容れよ。迷える者の 惑い悩みを。

全て受け容れ、呑み込みて、祈りの中に 昇華しょうかせよ。

導くことは、導かるること。

人の疑念を信念に。人の惑いを安らぎに。

祈りを通して共に高めよ。

さこい。